

市民人権講座を開催しました

高齢者の人権について

昨年11月、サンデルタ香良洲で市民人権講座が開催され、フルハウス在宅介護支援センターの近藤良子さんによる「次のターゲットはあなたかも？」と題した講演がありました。

いま、平均寿命の大幅な伸びや少子化を背景にして、全国的に高齢化社会が急速に進展してきています。そして、寝たきりや認知症などの介護を必要とする高齢者が増え、また世帯の構成では核家族化が進み、一人暮らしの高齢者や高齢夫婦のみの世帯も増加しています。

講演会では、地域在宅介護支援というご自身のお仕事の中で、近藤さんが実際に今まで関わってこられた高齢者の虐待被害や詐欺被害など、



いろいろなケースを中心に、参加した市民の皆さんに実態を知ってもらおうと話されました。

誰であれ、年齢を重ねれば身体的にも衰えが生じることは避けられません。しかし、そうしたことを理由に差別をするという行為は許されるものではありません。そして、介護をする人もまた、無理をしたり孤立してしまうことがないよう、地域として支え合える社会が望まれます。

高齢者が、自分の住み慣れた地域や家で、地域とのつながりを持って安心して生活ができるよう、また、その豊富な経験や能力を生かしながら、生きがいを持っていきいきとした生活ができる。そんな社会の実現をみんなで目指していきましょう。

コラム

自らの意識を問いつつ

「外国人だから、いじめられないか心配です。」10年前、担任するブラジルにつながるAさんの家に初めて家庭訪問した時の、Aさんのお母さんの言葉です。私はお母さんにこう返しました。「外国人とか関係ないですよ。大丈夫ですよ。」

年度が変わり、新しく担任したクラスには、ボリビアにつながるBさんがいました。私はBさんのお父さんから、Aさんのお母さんと同じ言葉を再び聞くことになりました。

それから、外国につながる子どもを担任するたびに、このような思いを聞くことになります。そこには、この不安な気持ちを子どもたちやおうちの人が抱えさせられている現実がありました。

日常会話は話せても、教科書の日本語が難しく苦勞している子どもがいます。日本で暮らしていくために、また、みんなと一緒に学校生活を送りたいという思いから、日本語の勉強に一生懸命取り組む姿があります。「子どもたちが互いを理解し、不安なく過ごせるように」とブラジルやフィリピンなど母国のダンスや遊びを教えに来てくれるお母さんたちの姿があります。「生まれた国が違って、子どもを愛する気持ちは同じ」「私は日本語があまり上手じゃない。でも、子どもにはしっかり勉強して力をつけてほしい。だから私もがんばって

家で勉強をみている」そんな思いをもって日本で生きる外国につながる人たちがいます。

そのような人たちとの出会いを通して、私自身が気付かされたことがあります。私は、生まれた国が違って、日本語が話せなくても、いじめられたり差別されたりすることはあってはいけないと思うし、そう思っている人はたくさんいると思います。しかし、日本で暮らす外国につながる人たちが不安を抱えさせられているのが現実です。そのような現実を見ようとも知ろうともせずに行った私の「外国人とか関係ないですよ」という言葉は、Aさんのお母さんにどのように届いたのでしょうか。冷たく無責任な言葉だったと、今、振り返って思います。外国につながる人たちに、不安な気持ちを抱えさせていたのは、まさに私自身だったのです。

「人は、どこに生まれようと、どこで暮らそうと、幸せに生きていく権利があり、周りの人の意識によって、その権利が奪われることがあってはならない」といった言葉をよく聞きます。でも、そんな周りの意識を作っている一人が私だったのだと思います。

誰もが幸せになる社会を作っていくのは私たち一人一人です。だからこそ私は、出会った人たちのことを忘れず、自らの意識や行動を問いつける自分でありたいと思います。

“外国につながる子ども”とは…

外国籍の子どもや、日本国籍を持っていても外国にルーツを持つ子ども